

学校と地域でつくる 子どもたちの未来

もはや、学校と地域は教育にとって切り離せない関係といえる。黒坂小学校は伝統として、高校や地域との交流を長年大切にしてきた。

一方の日野高校も、近年地域との連携を強化し、その効果は徐々に表れ始めている。

ここはあくまで通過点。この歩みは止めてはならない。



日野高校校長

TOMOYUKI NAGANO

永野智之

出会いが挑戦を呼び、成長を生む

校長である永野智之さんが日野高校に赴任したのが2年前の4月。赴任直後には、同校が目指す地域との連携の在り方や育てたい生徒像などを同紙でインタビューしたこともある。

「まずは、地域での生徒の活躍や成長を間近で見えた感想を聞かせてください。」

生徒には、「人の考えを理解する力」「自分の考えを発信する力」を養ってほしいと考えています。日野高校魅力向上コーディネーターである片平さんが地域とのパイプ役を担ってくれたおかげで、生徒が積極的に地域とかかわれる機会が提供できてきたと思います。今の教育は、学校の中だけで完結するものではなくなっています。今後もどんどん学びのフィールドを広げていきたいですね。

「今年度の課題研究のテーマが「地域の中で行動しよう」など、地域に根付いた高校を目指し、力を入れていく様子がうかがえます。また、地域とかかわる中で、生徒が学校の外で活動する機会も増えてきましたね。」

JK（地元改革）課の活躍はうれしいですね。地域の中で自分で考え行動する場所を与えてもらっていると思います。これからの人生を歩む中で、地域のことを知ることは大切です。コミュニケーション能力など、人とかかわる力を身に付け成長してほしいと願っています。

「一方、教育現場での課題や、地域・学校・行政が連携していく中で求められているものは何でしょうか？」

生徒が地域に出かけていく中で、以前と比べそれぞれの意識が少しずつでも変わってきていると感じています。しかし、学校現場では、地域を知らない教員が多いのも事実です。生徒が地域で学んだことを学校生活へ還元していくためにも、教員には積極的に現場へ出かけてほしいと思っています。

また、地域の方には遠慮せず思ったことを口に出してほしいですね。時に親のような目線で生徒の成長を見守ってほしいです。町には、例えばJK課の活動であったり、課題研究のたたらんちのメニュー開発、ポストカードの

作成など、生徒の考えが形にできる場づくりを一緒にできたらと考えています。

「少子化が進む中、こうした取り組みが後々効いてくるかもしれませんね。」

近い将来、生徒数が日野郡全体でも40人程度になると予想されています。当然、これだけでは日野高が存続できないのは明らかです。現在、日野高に通う生徒の約7割が日野郡以外から通っています。その生徒に地域とかかわってもらうことで、将来日野郡への移住や就職してくれる子が増えてくるかもしれません。そういう場をこれかもつくっていききたいですね。

地域を知った生徒の成長は目覚ましいものがある。私たちもその姿に後れを取らないようにしなければなりません。例えば、職員室で管理職が難しいことを言っている人も人は育たない。広い視野で物事を考えたいものだ。「地域と歩む」ことを選んだ日野高校の選択が「正しかった選択」となるよう私たちも一緒になって応援していきたい。

黒坂小学校校長

KENICHI KANBA

神庭賢一

ふるさとを生かした教育が

愛着を呼び、地域を結びつける



くろさかしょうがっこう こ 黒坂小学校かわっ子

このかわっ子の泉事業は、校庭に木を植えたり、緑を増やす公益社団法人 国土緑化推進機構からのす。

この助成金は、全国のローソンのお店にある「募」ただいた、たくさんの募金で成り立っています。

このピオトープ「みんな大好き かわっ子の身」きている様子を観察することを目的としています。とを守ってください。

- かかってに生き物を入れたりしない。
- 池の中には入らない。
- かかってに生き物を取ったりしない。

「地域を大切にしている心、思いやりの心を育てる」とことを目標の一つとして取り組んでいる黒坂小学校。全校生徒合わせてわずか28人ながら、地域資源を生かした体験活動や交流活動を長年の伝統として続けてきた。その姿は、少子高齢化が進むこの地域において希望の光となっている。

―黒小といえば、地域の中で元気に活動する子どもたちが思い浮かびます。

黒坂小学校の良さは、「児童一人一人の思いを授業に生かせる」「子どもの学習意欲が高まる」「地域との連携」などにあると思います。特に、地域とは校内マラソンや町駅伝への参加を土曜日授業に組み入れ、保護者や地域の人が参加しやすくするなど、その結びつきを強めることに重点を置いています。

―日野高校とも長年交流を続け、黒小の伝統でもあり特色の一つにもなっていますよね。

サツマイモやジャガイモなどの栽培をはじめ、米づくりでは田植えから収穫ま

で一緒に行っています。その中で、高校生や地域の人への感謝など、自分の気持ちを表現して伝えることができるようになってきました。これも日野高校があるからこそだと感じています。

―日野高校生にとっても貴重な経験になっています。今後、日野高との交流で期待することはありますか？

子どもたちが、高校生のやっていることを聞く機会があればいいですね。過去に学習発表を高校生の前で行ったことがあります。



高校生と児童だけで行う田車押し。お互いの距離もぐっと近づく

お互いに学び、教えあえる場があれば、達成感や自己肯定感などの育成につながるのではないのでしょうか。

―学習発表といえは、小学校の中に作られたピオトープを使った学習など、身近

にある自然を生かした取り組みを実践していますよね。

学校の周りは鶴の池や滝山公園、日野川など豊かな自然に囲まれています。特に、ハッチョウトンボやメダカ、セッコクなど県の絶滅危惧種に指定されている動植物が多く群生しているんです。それらを子どもが直に触れることでふるさとへの愛着が生まれることを期待しています。

―自然だけでなく人も地域資源として授業の中に生かしていると聞きました。子どもたちには将来どんなことを望みますか？

最近では、小早川秋聲や田淵行男といった郷土出身の偉人を紹介する授業も行っています。ふるさとを大切にしてきた先輩方を知ること、ふるさとへの誇りや自分の将来を考えるきっかけになっていると思います。子どもたちはいつかふるさとから巣立つときが必ずやってきます。その時、自分からふるさとの良さを発信できるように育てほしい。地域に根ざした教育がいつか花を咲かせてくれることを願っています。